

私の戦中戦後十四年の軌跡

神奈川県 久保 田 穆

生い立ち

私は、昭和九（一九三四）年に東京で生まれました。家族は、両親と三歳年上の兄との四人で、父は東京工業試験所に勤めていました。昭和十五年には父が満州化学工業株式会社（当時は満化といわれていた）に転勤となったので、一家を挙げて満州国大連市郊外の甘井子に移りました。甘井子^{カンヤシ}は、大連湾をはさんでちょうど大連の対岸になるところに位置します。私たちが住んだ家は、満化の社宅で海岸から約三キロメートル離れた高台にあって、社宅の窓から大連湾入口の景勝地三山島を一望することができて、景色の良いところでした。

戦時中の暮らし

昭和十六年四月、私は大連市甘井子国民学校に入学

しましたが、その年の十二月にはあの大東亜戦争が始まりました。寒い講堂で校長先生のお話を聞いたことを、今でもよく覚えています。開戦から二、三年は、特別に日常生活での変化はなく、ラジオや新聞で大戦果の報道を見聞していて、日本が勝つものと思っていて少しも疑いませんでした。小学校三年生の夏休みには、母と兄と一緒に浜松の祖父の家に遊びに行くという余裕もありました。しかし昭和十九年、四年生になった頃から戦局は思わしくなくなり、授業の中においても軍事的色彩が濃くなってきて、モールス信号とか手旗信号とか銃剣術などを教わるようになりました。

この年の夏には、母が肋膜炎を患い入院しました。懸命な治療看病に努めましたが、その甲斐もなく亡くなってしまいました。今考えてみれば思い過ぎしかも知れませんが、当時の医療器具の不備、良質な薬品の不足などで、十分な治療ができなかったからではないかと残念でなりません。

昭和二十年の春には五年生になりましたが、この頃

になると大連でも空襲が頻繁にあって、その都度防空壕に入るようになりました。また、授業時間を使って鉄屑拾いに動員されたこともありました。鉄屑拾いに出ると褒美として水あめがもらえましたが、当時は既に砂糖も配給制になっていて容易に手に入らず、甘い物に飢えていたので嬉しかったことを覚えていますが。しかし、そんな食べることについては良く覚えていても、夏休みの宿題をしたとか学校での行事があったという様な記憶は全くありません。恐らく空襲を気にしながら友達と遊んでばかりいたのだろうと思います。

八月十五日、この日は朝から晴れていてとても暑い日でした。私は、この日に重大放送があることは聞いていましたが、父に言い付けられて中国人街に非常用糧食の乾パンを買に行きました。家に帰ってから友達のところ遊びに行つて、そこで日本が負けたことを聞かされました。それ以前から、何となく物資の不足が増えてきたり、空襲の回数が多く激しくなったり、日常の状況が悪化してきているのはなぜだろうかという不安感を薄々持っていましたので、やはりそう

かという気持ちでした。その日はそれから夕方まで、友達と「これからどうなるのだろうか」、「内地には帰れるのだろうか、帰れるとしたらいつ頃になるのだろうか、内地のどこに帰るのか、そこはどんな所か」などと話し合っていました。子供心にも前途に対していろいろと不安を感じていました。学校は夏休みでしたが、そのまま閉校になってしまいました。

終戦直後の大連

終戦後、大連地区においてもしばらくの間は無政府状態となり、暴動の起こりそうな気配が日に日に増してくるような感じで、在留日本人父兄により、自警団が組織されました。私の家は母がいなかったので、父が自警団の仕事で出ている間は兄と二人で押し入れに入つて、父の戻るのを待っていたものでした。しかし、幸いにも大連地区は不凍港である大連港を有している、軍事上も重要な拠点であったために、ソ連軍の進駐が素早く、終戦後一週間ぐらいで無政府状態は解消されて、徐々に治安も回復してきました。しかしその反面、いつの間にか行方不明になってしまった人

がいたのも、この頃のことでした。終戦後に暴動が起
こりそうになったのも、戦前に日本が大々的に唱えて
いた「五族協和」「王道楽土」などの美辞麗句のもと
に建国した満州国に対する、中国民衆の不満の発露が
然らしめたものと私は思っています。私もまだ子供で
したが、日本人は一等国民で、中国人は三等国民だと
いうふうと考えていたのは確かです。私たちが学校の
帰りに中国人街を通り、中国人の店に石を投げガラス
窓を割っても、罪の意識は持っていませんでした。あ
る友達は、空気銃で中国人の大人を撃ったこともあり
ました。また、通学路の途中に警察署がありました
が、度々中国人が日本人の警察官から殴られているの
を目撃したものです。

ソ連軍の進駐により、満化の社宅の約半分が接収さ
れましたので、残った社宅に社員家族が共同で生活す
ることになり、私の家にもKIさん一家とKAさん一
家移って来られて、三家族の同居となりました。最
初に進駐してきたヤマノフ中將を司令官とするソ連軍
は、うわさによるとその主力は四人部隊とのことでし

た。事実、その部隊のソ連兵は非常に粗暴で、腕時計
とか貴金属などを目の色を変えて探し回り、略奪した
腕時計を四個も五個も腕にはめて、得意になっている
兵隊をよく見かけました。また、道端で石を投げ合っ
てけんかをしているソ連兵もよく見かけました。

そんなある日の夜、同居していたKAさんが帰宅し
た際に、後を付けてきたソ連兵四人が、玄関を開ける
と同時に家の中に入ってきて、すぐに赤ん坊を除いて
家中の全員を玄関の板の間に集めました。私もその中
の一人でしたが、二人の兵隊が私達に拳銃を突きつけ
て見張りをし、残る二人が家捜しを始めました。何を
持って行かれたかは覚えていませんが、拳銃を突きつ
けられた恐怖心は今でも忘れられません。その後も
二、三度、ソ連兵が家の周りを回っているような靴音
を聞いたことがあります。幸いにも皆が用心をする
ようになったので、家の中に入られることはありません
でした。

日僑学校の生活

一カ月ほど経つと治安もだいぶ安定してきたので、

学校が再開されることとなりました。しかし、甘井子国民学校の校舎はソ連軍に接収されてしまったことと、大部分の先生が大連市内に移ってしまったことで、終戦前と同様の学校運営ができなくなりました。

そこで満化、満曹（満州曹達）、満石（満州石油）等の大連地区に所在している日本の企業各社の社宅ごとに、教員資格を持っていない父兄の中で適任者を先生に加えて、小学校が再校されました。私は、満化社宅内の学校に通うことになりましたが、校舎は旧消費組合の事務所の一室で、江戸時代の寺小屋も斯くやあらんと思われるように、畳に座っての授業でした。さらに部屋が足りないのです、授業も午前・午後の二部制で、私は高学年だったので午後からの授業でした。教科は何だったのか記憶にありませんが、算数だけが印象に残っています。家での勉強は、終戦前に使用していた算数の問題集を解くことでした。

日常の生活面では、父が再婚したので私には新しい母ができました。四年生の八月に母を亡くしてから、兄と他家に預けられたり、学校から帰っても中学

生の兄の帰りが遅いので一人で家に居たりしていて、随分寂しい思いをしていました。新しい母が家に居てくれるので、気持ちがとても落ち着いたように思いました。父の勤めている満化も、中国側に接収されて仕事を再開したので父も同じ職場で働いていましたが、ただ日常の生活は苦しく、売り食いもしていたようです。

そのうちにソ連兵も、初めに進駐してきた囚人部隊と違って、規律の正しい部隊に入れ替わりました。今度の部隊は、コズロフ少将の指揮する部隊でした。その頃の思い出として、ローマ字で文章を書いてソ連軍の将校に見せたところ、当然のことながら書いてある意味は分かってもらえませんでした。その将校の家に連れて行かれて、お菓子を食べさせてくれたことがあります。

こうしているうちに昭和二十二年になり、日本への引揚げが本格的に始まりました。満化でも、大勢の社員が続々と帰国の途につきましたが、高級技術者は技術を中国人に委譲し、円滑に工場運営ができるように

なるまでは、引揚げが許されませんでした。表向きは自主的に残留したという形でしたが、実際は強制的に残されていました。父も化学関係の技術者として、残留組に入れられました。

私の同級生は、全部で百数十人いたと思いますが、引揚げが終わった時に残っていたのは十人足らずでした。残った者は、入学試験を受けることなく自動的に進級して中学生になりましたが、甘井子地区には中学校がないので、対岸の大連市街に設立された大連日僑学校中等部に通うこととなりました。校舎は中央公園の近くにある春日小学校でした。通学は、甘井子の家から周水子まで約六キロメートルの道を歩き、そこから電車を乗り継いで中央公園まで、約二時間半ほどかかりました。朝五時頃に起きて家を出て、八時頃には学校に着いていたと思います。幸いにも、通学途中での中国人からの虐待やいじめはありませんでした。生徒は大連の各地区から集まってきましたが、私の学年は約七十人でした。教職員は残留された先生を中心として、それに数学、物理などの各分野の専門の方々か

加わって構成されていました。体育の先生にはオリンピック水泳選手であった宮畑虎彦氏が、また、数学の先生には、後に芥川賞を受賞した作家の清岡卓行氏など、多士済々な方がおられました。大連では、十一月頃になると雪が降り出して、四月中頃まで降っていて寒い日が続くので、私たちにとって冬の通学は非常に負担でした。結局通学は一年間だけで、甘井子地区にも中学校を開設することとなりました。校舎は満化社宅の一軒が当てられ、先生には父兄の中の適任者を選び出し、それぞれ得意分野の学科を担当してもらいました。日中の仕事が終わってからの授業なので、数学、物理、化学などは夜間授業となりました。また、英語は適任の人がいなかったため授業がなく、その代わりにロシア語の授業が行われました。教科書もないので、教師代行の父兄の方々も準備が大変なご苦労があったことと思います。こんな状態でいるうちに、また一年が過ぎてしまいました。恐らく父兄の負担が大きかったのでしょうか、再び大連市内の日僑学校中等部に戻るようになりました。しかし、甘井子から通

学することは到底できないので、学校の近くにあった空屋を寄宿舎として寮生活を始めることになり、昭和二十四年の夏に入寮しました。校舎は老虎灘ロウコウタン近くにあった静浦小学校でした。この年は大連では珍しく台風が襲来して、街路樹が倒されたりしてかなりの被害がありました。学科の方では、以前に英語の先生だった方が残留されていて、やっとその先生から英語を学ぶことができました。寄宿舎生活は生まれて初めての経験でしたが、通学の苦勞がなく、終戦前のように上級生が下級生を集めて鉄拳制裁を行うという野蛮な行為もなくなり、快適でした。二週間に一度は家に帰れることになっていましたので、皆これを楽しみにして毎日を過ごしていました。

昭和二十四年九月末に引揚げが再開されましたが、この時も父は残留になり帰国できませんでした。引揚船が出港する日になって、大連港まで見送りに行きましたが、その日は風が少しありましたが、晴れた良い日でした。多数の同級生も引揚船「山澄丸」で日本に向かって行きました。別離の念はお互い様でしたが、

「だれそれは、タオルを絞って泣いていた」などと後々まで話し合ったものです。このようにして大連地区では、戦前二十万人とも三十万人とも言われていた日本人が、この時期には千人足らずとなってしまいました。見送りから寄宿舎に戻ると、舎内にも何か寂しい雰囲気が出ていました。気を紛らわすために、残留者数人と近くの川にハゼを捕りに行ったことを覚えていきます。

学校では課外活動などはありませんでしたが、引揚者が出発してから二日ほど経った時に、鼓笛隊を作るので集まるようにとの通知があり、私も参加しましたが、約三十人が集まりました。指導者は、戦前から大連地区で音楽活動をされていた木村遼次氏で、それこそ熱心に指導されました。帰国後十数年経ってから初めて知ったのですが、鼓笛隊で使用していた笛などは、有志の方々からの寄贈によるものだったとのことでした。笛は真鍮パイプに穴をあけたもので、先端に赤い毛糸の房が付いていて、本体を磨くと金色に輝く立派な物でした。一週間ほど毎日放課後に猛練習を重

ね、初演奏は十月十日の市内各工場、職場の文芸工作員によるパレードに参加した時で、一日中大連市内を
行進しました。その後も何度か文化祭、運動会などで
演奏しましたが、この笛は今でも手元にあつて、時々
吹いては当時を思い出しています。

十月一日には、中華人民共和国が誕生しましたが、
私たちの生活には何の変化もありませんでした。

昭和二十五年二月、残留している日本人が大幅に
減ったこともあり、これまでの静浦小学校の校舎では
大きすぎるので、文化台の民家で、旧鳥羽邸といわれ
る家を中国側より借り受けて移りました。民家といっ
ても大邸宅で、中等部、高等部の約六十人全員を收容
することができました。甘井子地区から来ている者
は、近くの四軒の民家を借りて寄宿舎とし、そこに入
寮しました。各寮の名は、新生寮、団結寮、前進寮と
称して、もう一軒は共同の食堂となりました。朝六時
半起床、掃除後に全員集まって体操、朝食、登校とな
ります。課業が終わるのは学年によって異なります
が、夕食までは自由時間でした。入浴は週二、三回

で、入浴当番が薪割り、たき付け、火の番などを行
いました。自習時間は各寮ごとに自主的に決めました。
当時はラジオ、テレビもないので、大体は午後十時
には消灯しました。部活動はなく、同好者が集まっ
てはバレーボール、バスケットボール、ピンポンなど
をやっていました。野球、サッカーなどの広い場所を
必要とする運動は、やった記憶がありません。生徒の
人も少なく、道具も揃わないからだだったと思います。
学校主催の行事としては、文化祭、運動会、遠足、夏
休みの海水浴などで、遠足は凌水寺に、海水浴は星
浦に行きました。

昭和二十六年六月上旬の頃だったと思いますが、中
国側より学校に対して「中国反革命分子の人民裁判と
処刑（すなわち銃殺現場）があるので見学せよ」とい
う通達があり、その日は暑い日でしたが、午後から先
生に引率されて見学に行きました。人民裁判は、市街
の広場に舞台のような物が造られていて、胸に名札を
ぶら下げられ、頭には「とんがり帽子」をかぶらされ
た反革命分子と称される人たちが、後手に縛られて舞

台の上に並んでいました。罪状が読み上げられると、民衆の中から発言やシュプレヒコールがあり、それが判決で、すぐに全員が銃殺刑でした。刑場は緑山の麓で、刑場に行くとあらかじめ穴が五十ぐらい掘られていました。市中をトラックに乗せられて引き回された反革命分子がその穴の前に立たされ、一人につき二人の射手が銃を構えて、次々に射殺していきました。この有様を見ていて考えたことは、彼らは皆本当に罪状どおりの行為をしたのだろうか、中には銃殺刑に値しない無実の人もいるのではないか、その人はどのように思っているだろうかということでした。これを見て、私も意思表示や行動には十分注意しなければ、誤解されてとんだ目に遭うことになるかもしれないと思っただけです。銃殺される者の態度は、各人各様でした。気丈な人は穴の前に自分自身で歩いて行くし、気弱な人は両脇を他人に抱えられながら、やっとその穴の前にたどり着くなど様々で、見ていてもこっちは耐えられない思いました。しかし、銃殺されて穴の中に転がり落ちる場を見ないで、自分勝手にその場を去

ることはできないのが実状でした。その場を抜け出すということは、この裁判に反対だと受け取られかねないからです。結局日本人も中国人も、そこから去る人は誰もいませんでした。この処刑を見て寮に帰った私たちは、あまり言葉を交わすことなく、沈黙の夜でした。

その後、半年ほど経って、またもや銃殺刑を執行する場に立ち会ったことがありました。冬休みに甘井子の家に帰っていた時に、中国側より日本人家族に対して「人民裁判を見学するように」との指令がきました。私は銃殺刑に立ち会うのは二度目だったので、前回に比べてそのショックは多少小さかったのですが、やはり複雑な気持ちでいっぱいでした。この時処刑された人は一人でしたが、前回よりも間近で見る羽目になり、胸中は穏やかではありませんでした。前回と同じく人民裁判を行い、判決が言い渡されるとすぐに銃殺されました。処刑される人は目隠しのうえ後ろ向きに座らされ、死刑執行者二人が発砲しましたが、一発目は当たらず、次いで二発目を撃ちましたがこれも当

たらず、さらに三発目が発射され、やっと頭部に命中しました。脳漿が飛び散ってそのまま倒れ込みました。皆は黙ったまま帰途に着きましたが、家に帰ってから、またその後も、このことを話題にすることはありませんでした。

この年には、残留者で組織していた「大連市日僑勤労者組合」の内部での対立がありました。それは、組合幹部とそれに反発する組合員との対立だったということの後になって知りました。しかし、この対立が学校内にも持ち込まれて、先生と生徒の対立となりました。私はもちろん生徒ですので、先生に反抗する側にいたわけです。私自身は、なぜ先生に反抗したのか今だにはっきりした理由を見い出すことができません。結局は、烏合の衆の一人だったのだと思います。本来これらの対立は大人たちの対立であって、子供である生徒とは何の関係もなかったわけですから、大人に利用されていたのではないかと思えます。

昭和二十七年になり私も高等部三年生となりました。昭和二十四年に引揚げが再開されて以来、本職の

先生方も多数帰国されて、その穴を埋めるために、大学教授だった父兄の方や、会社や研究所に勤める専門知識のある父兄が先生となって授業が進められていました。語学では、英語でなく中国語が採用されて、劉徳有という元日本人学校に勤務していた方が先生でしたが、この時に習った拼音文字ピンインによる中国語は、後々に私の仕事上でも大変役に立ちました。私たちは、大連日僑学校という非常に特殊な学校でしたが、まがりなりにも勉強を続けることができました。これは何と云っても中国政府の援助によるものではあります。父兄の献身的努力もこれに勝るとも劣らないものであったと思います。

高三になった私にとって、この先どうなるのかが非常に問題でした。日本であれば大学受験か、就職かという二者択一の問題で済みますが、私には正直に言うて目標が何もなく、ひたすら現状に甘えて過ごすだけでした。ただ三年前に、兄が大連工学院の化学系に入学していたので、私も大学に進めば良いのかなという漠然とした思いがありました。当時残留者の子弟で中

国の大学に入っていたのは、兄など二人だけでした。六月になると、中国政府による大学全国統一入試の話があつて、私も参加することに決めました。それまでは入試準備など何一つしていなかつたので、夏休みは友人と二人、家に帰らず寮に残つて受験勉強をするこゝとなりました。八月下旬の試験はかなり緊張して受験しました。数学、歴史以外にどんな科目があつたか忘れてしまいましたが、ただ中国政府の好意により、外国語は免除されたことは覚えています。志望校、学科については、家族と離れて大連以外に行くことは考えられないので、兄が学んだ大連工学院を志望し、消去法で残つた機械を志望学科としました。合格発表は新聞で行われ、日本人は全員合格しました。

大連工学院での生活

機械系には五人が入りました。当時は全寮制で、学費、食費、住居費などは一切不要で、国の政策として解放軍から派遣された人も大勢いました。学期始めは九月からでしたが、新入生は十月初旬に入寮しました。校舎は旧南満工専の校舎を使っていましたが、新

校舎を星ヶ浦から三キロメートルほどの山側に建設中でした。入寮の当日は現校舎に集合し、そこで一夜を過ごし、翌日建設中の新校舎に移動しました。寮は学校の中で、部屋には二段ベッドが十台ほど並べてありました。学科は、数学、物理、化学、投影幾何学、ロシア語、政治学、実習として木型製作、溶接等がありました。教師は当然中国人でしたが、ロシア語だけはソ連人の女性が担当していました。授業は政治学を除けば、数式、化学方程式、元素記号なので何とかなりました。生活面では、中国人の中に交わつての生活なので、五人いた日本人の仲間だけで集まり、話し合うということはありませんでした。

中国内陸への移動

昭和二十八年の五月になって、帰国の話が持ち上りました。今度は残留者全員が帰れるということで、皆は大喜びしましたが、私たち中国の学校に入っている者はどうなるのかと心配して、両親や友人と相談しました。一つは、せっかく中国の大学に入ったのだから、家族は帰国してもこのまま学業を続けて卒業して

から日本に帰るという考えと、もう一つは、家族と一緒に帰国するという考えの二つの進路の選択でした。前者は、当面の目標ははっきりしているが、先行きどうなるのかが不安でした。結局は帰国を選ぶこととなりました。大連工學院をやめて甘井子の家に帰り、帰国の順番待ちをしていました。しかし、一カ月が過ぎても何の進展もありません。そこで甘井子地区の残留家族から、中学生に数学を教えて欲しいという要望が出て、私はわか教師として駆り出されました。他に何もする事がなかったので、結構面白くて気が紛れて良かったと思います。

待機のまま、四、五カ月が過ぎましたが、十一月下旬になって急に中国政府から満化社宅の日本人全員に対して、集合がかりました。もう寒さも厳しくなっていました。家族連れ立って集会場に行きました。そこで指示されたことは、「当大連地区は、軍事的に重要な拠点であるから、このまま日本に帰ったら大連についていろいろと聞かれて困るだろう。従ってこれからしばらくの間、大連を離れて中国各地に分散移住

してもらおう」ということでした。我が家はその第一陣として、湖南省衡陽フンヤウ市衡陽鉍山機械廠に移住させられ、三日後に出発ということになりました。準備時間もなく、そのまま置いてきた家財もかなりありました。祖父が図工の先生だったので、彫刻とか絵などが相当ありましたが、全ては持って行けませんでした。出発の日にはトラックに荷物を積み出し、私たちは大連駅に近い収容所で一夜を過ごしました。集まった人は百人ぐらいいましたが、そのうち衡陽に行く家族は甘井子から私たちと、Tさん、Oさんの三家族で、大連地区からKさんと、全部で二十人ぐらいでした。翌日、十三年間住み慣れた大連を離れることになりました。終戦後は、勝手に居住地区を離れることはできなかった。大連を出るのは全く初めてでした。ましてや今回は、山海関を越えて中国大陸に足を踏み入れるのですから、大連を離れる寂しさよりも未知の土地を見る楽しさの方が強い思いでした。大連駅から日僑専用車両に乗り、夕方に出発しました。列車が動き始めると万感胸に迫るものがありました。翌朝奉天（瀋

陽)に到着し、ここから西に向かって走り出し、次の明け方に山海関を通過しました。午後三時頃、北京郊外の豊台に着き、列車はしばらく停車しました。この時間を利用して、有名な北京ダックを買って食べましたが、その味は忘れられません。再び列車は動き出し、河北省、河南省、湖北省と中国大陸の中原を走り通して、翌日の昼頃に漢口カンポウに到着しました。ここで列車から降り旅館に宿泊しましたが、大連を出て四日目、やはり中国大陸は広いという実感を持ちました。漢口からさらに列車を乗り継ぎ、岳陽ガクヨウ、長沙チヨウサ、株州カフシニウを経由してやっと衡陽駅に着きました。改札口を出てみると、駅は道路から十五段ほどの階段の上にあります。周囲は見渡す限り田んぼでした。これが湖南省第二の都市だということに驚きました。もともと、市街地は湘江の対岸にあったのですが、これもそれほど大きくはありませんでした。鉱山機械廠の出迎えを受けて工場に向かいました。工場は湘桂線のすぐ脇で、線路を挟んで高台側に社宅があり、この社宅に居住することにになりました。約三十軒ぐらゐの集団で、我が

家の隣に大連地区からのKさん一家、路地を隔てて甘井子地区からのTさん、Oさんの二家族が住むことになりました。社宅は長屋形式で、一軒一軒に多少の庭もあり、部屋は六畳と三畳の間でした。もちろん中国式ですから畳はなく土間で、風呂も便所もあります。風呂は会社の共同風呂で、便所は家から五、六十メートル離れたところにある共同便所です。大便の方は通路の両側に五個ほど並んでいて、隣とは壁はあっても戸はなく、生活上一番不便を感じました。

父の仕事は、機械廠に新しく化学分析室を作ることでした。Oさん、Kさんと一緒に計画策定、化学器具、薬品の購入等の仕事でした。後日談ですが、私は帰国後、石川島播磨重工に就職したのですが、昭和六十三年に中国重慶のアルミ工場の仕事を受注し、その時の中国側の機械製作工場が衡陽鉱山機械廠でした。ここから派遣された技術者との雑談で、私の父はかつて貴工場で仕事をしたことがあったと話しましたら、その時は信じられないという顔をしていましたが、帰国して半年ぐらゐ経って、当時の父の業務日誌の一部

を送ってくれました。私はこの日誌によって、父達の仕事の内容を理解しました。

衡陽に来てから、私自身は何もする事がなく、弟妹たちも学校に行けず、ただ遊んでいるだけでした。私は弟を連れて付近を歩いたり、一人で遠出をして日をつぶしていましたが、社宅に四人ほどいた小学生に勉強を教えて欲しいとの話があり、毎日午前中に勉強を教えることになりました。こうして過ごして昭和二十九年を迎えました。

その年に、中国政府より兄と私に大学に戻るようにとの通達がありました。兄は化学系、私は機械系だったため、衡陽に一番近い学校ということで兄は広東省の広東工学院、私は江西省南昌の華中工学院に行くことになりました。

華中工学院での生活

華中工学院では、長沙にいた同級生のN君と一緒になりました。一月下旬に出発と決まり、衡陽外事科で移動証明書を受けるために、初めて自分の印鑑を作りました。この印鑑は今でも使用していますが、水牛の

角で作ったもので、制作者の名前が入っています。一度この人に会いたいのと思っていますが、まだ機会がありません。

衡陽駅には家族総出で見送ってくれましたが、生まれて初めて家族と離れて遠い未知の地に行くので、かなり緊張しました。車内では、車窓に広がる風景を眺めるだけでした。午後四時頃に南昌駅に着きましたが、迎えに来る人もなく、成り行き任せと覚悟してホームに降りたら、すぐにN君と出会いました。彼は中国人の同学と一緒にいましたが、荷物を取りに来ていたそうです。手荷物を受け取り、三人で車に乗って学院に行きました。学院の裏手にある寺が寄宿舎でした。専攻学科は、私が機械製造工芸系、N君は汽車（日本語では自動車）系だったので、すぐに別れ別れになりました。寄宿舎の僧坊は六畳ぐらいの広さで、アンペラ敷きに布団を敷いて寝るのです。五人で一部屋でした。私とN君は、転校生ということで放課後に補習授業を受けさせられました。先生一人に生徒二人なので、中国語の勉強に大変助かりました。食事は食堂で

食べるのですが、テーブルがあるだけで、取っ手付きのコップにご飯（朝は粥）とお菜をよそって、立ったまま食べるのです。これも一週間ぐらいで慣れてしまいました。

三月半ばに、新校舎が武昌^{フコウ}郊外の喻家山の麓の一部出来上がったので移転することになりましたが、私は日本人なので、移動するには南昌外事科に申請をして移動許可証をもらう必要があったのですが、学院として移転するのだから個人で申請する必要はないと思いつき、許可証をもらわずに武昌に移りました。武昌に移転してから一カ月が過ぎた頃、武昌の外事科から呼び出されました。移動許可証なしで転居したためで、裁判にかけられたように立たされたままで調べられました。口頭注意だけで事なきを得ました。

寄宿舎は新築で快適でした。八人で一部屋、十畳ぐらいの広さで両側に二段ベッドが並び、真ん中に机と八脚の椅子が置かれていました。風呂はシャワーだけでした。特に印象に残っていることは、昼休みが二時間もあり昼寝ができることでした。

七月に入ると雨期になり、長雨が続き長江の水位がだんだんと上昇してきました。七月の末に夏休みになり、衡陽の家に帰るつもりでしたが、長江流域が大洪水となり、列車も不通で帰省を断念しました。寄宿舎にもかなりの学生が残っていましたが、堤防決壊予防のため学徒隊が結成されて出動しました。出動第一日目、雨の中で畚^{もこ}担ぎをしたのですが、慣れない風土と重労働で、マラリアにかかってしまいました。熱が上がりたり下がったりで、一週間ほど寝込んでしまいました。体力も急速に落ちてしまいました。結局、私の畚担ぎは一日で終わりました。それからは、残留隊員として出動者への激励文書きをしていました。親身に看病してくれた同学たちのことは、今でも忘れられません。

九月には二年生になり、専門の学科が増えてきましたが、言葉の方もそれなりに上達して、自信がついてきました。

帰国の喜び

十一月下旬に、突然中国政府より、「帰国が決まっ

たので、至急準備をして直接塘沽トウカに行くように」との連絡がありました。衡陽の家族は既に出発しているとのことでした。中国政府からは、帰国準備金も支給されました。私はこの金でトランクを買って、準備を整えました。クラスでは盛大な送別会が催され、記念にといって教冊の本を贈られました。また、ある同学からは清朝時代の切手を数枚もらいました。皆の親切は忘れられません。

連絡を受けてから二日後に、塘沽に向かって出発しましたが、列車に乗り込んで席を探しているところに、偶然に広東工学院に行っていた兄と会いました。ほっとして心強くなりました。十一月二十六日塘沽に到着、先に着いていた家族とも、十月月ぶりに一緒になることができました。二十七日の午後、迎えの興安丸に乗船し出航しました。途中、しげに遭って船酔いに苦しめられましたが、三十日早朝には鳥取県沖を通過していました。甲板に出て本土を見た時、海岸の景色は本当に白砂青松という言葉がぴったりするもので、やはり日本は美しい国だということを改めて実感

しました。舞鶴港に着き、検疫を終えて十時頃に上陸しました。出迎えに来ていた祖母、叔父、叔母とは十数年ぶりの再会でした。

結びとして

帰国後、既に五十歳になっていた父の就職がなかなか決まらずに、母や兄が働きに出て家計を支えるなど生活の苦労がありました。五年ぐらいで落ち着きを取り戻して、ようやく安定した生活を得て現在に至っています。私も六十五歳という、いわゆる高齢者の部類に入ってしまったが、私の過ごした戦中、戦後の十四年間は、帰国後に経過した四十五年間と同じ比重で、否、それ以上の重さで脳裏に焼き付いています。

私は、幸いに残留孤児にもならず、人並みの教育を受けることができました。今日までも、会社の仕事を通じてですが、日中友好に微力を注ぐことができ、現在でも当時の人々と文通しています。これからも、私のできる範囲で日中友好に尽くしていく所存です。